



特集

# 写真でたどる 多摩区の昭和レトロと現在

「昭和」という時代が始まってから、およそ1世紀。いまま昭和の懐かしさを感じるスポットが点在する一方で、新たな風景も息づいている多摩区。多摩川の憩いの風景、暮らしを支えてきた商店街や鉄道、人々を夢にさせた遊園地—その姿は時代とともに形を変えながらも、地域の魅力として受け継がれている。

P21-22 MAP位置

## 暮らしを支えてきた 多摩川

登戸をはじめ、菅・中野島・宿河原には対岸と結ぶ渡しがあり、人々が行き交うにぎわいの場だった。また昭和の多摩川は川遊びと花見で人気があり、中野島境から矢野口へ続く稲田堤の桜並木は、関東でも有数の名所として昭和初期まで親しまれた。



も-2



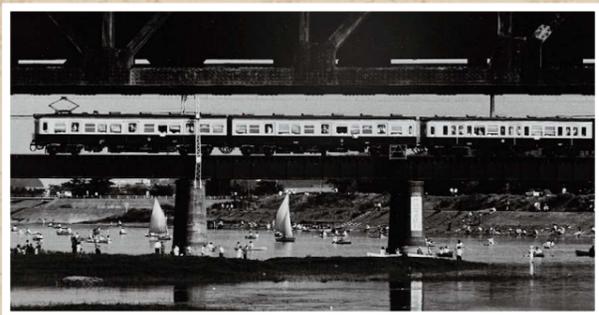
な-1

登戸の渡し(左、昭和20年代後半)と菅の渡し(右、昭和45年)「登戸の渡し」は登戸と狛江市和泉を結び、梨や桃、黒川炭など、さまざまな物や人を運んだが、昭和28年の多摩水道橋開通に伴い廃止された。市内で最も上流にあり、稲田堤の桜や対岸の京王閣でにぎわった「菅の渡し」は最後まで残っていたが、昭和48年に惜しまれつつ姿を消した。



な-1

多摩川に沿って続く稲田堤の桜のトンネル(昭和23年)明治31年、当時の稲田村菅の人々によって、洪水時の堤防の防護のために約250本のソメイヨシノ桜の苗が植えられた。それから10年も過ぎると都会から次第に花見客が訪れるようになり、やがて東京近郊の花の名所の一つに。昭和35年頃まで多くの人が訪れていた。



多摩川の水遊び 小田急線多摩川鉄橋下(昭和39年頃) 近隣にプールがなかったこの頃は、多摩川が絶好の水遊びスポット。東京方面からも電車で多くの人々がやってきて、水泳やボート遊びを楽しんだ。アイスキャンディー売りや、「海の家」ならぬ「川の家」もあったという。



多摩川の現在

散歩やジョギング、サイクリング、スポーツなどを楽しめる、いまま変わらない市民の憩いの場。登戸駅近くの「登戸・多摩川カワノ」などを会場として、さまざまな催しが定期的開催されている。



も-2



も-2

登戸・たまがわマルシェ(左) 地域の店や市民団体の活動を知らってもらう機会として定期的に開催されている。「登戸の渡し」体験(右) 令和6年・7年には、ミニポートによる「登戸の渡し」体験が1日限定で行われた。

## 人々の生活とともに 街並み・商店

江戸と相模を結ぶ「津久井道」の宿場町として栄え、交通の要衝だった「登戸」と、遊園地の玄関口として週末の人波を集め、駅前の商店街が土産品と買物客でにぎわった「向ヶ丘遊園」。川崎北部の玄関口として、休日のレジャーと日常の買物を支える商業・飲食・サービスが集積するにぎわい拠点だった。



も-3



も-3



も-2

向ヶ丘遊園駅北口の登栄会商店街(上段左、昭和30年代) 当時は登戸の官庁街へ続く繁華街だった。昭和47年に多摩区が誕生し、現在はこの通りの先に多摩区役所がある。向ヶ丘遊園駅南口のタイエー向ヶ丘店(上段右、昭和40年代) 昭和46年に開業し、川崎市の北部の大規模ショッピングセンターとして親しまれていたが、令和2年、建物の老朽化を理由に一度閉店。令和6年に再オープンした。稲田公民館(左、昭和31年) 戦後各地に公民館が設置され、住民自治の中心として大きな役割を果たした。



も-2

旧津久井道の街角に貼られた映画館の看板(左、昭和32年頃) 向ヶ丘遊園駅北口の駅前には「登戸銀映」という映画館があった。看板には大人55円、学生40円、子ども30円と当時の映画鑑賞料が書かれている。登戸駅前商店街(右、昭和59年) 狭いながらも活気に満ちていた。旧津久井道入口には北向き地蔵があった(現在は光明院へ移転)。



街並み・商店の現在

登戸から向ヶ丘遊園にかけての「登戸土地区画整理事業」の基盤整備が令和7年度末に完了予定。道路や駅前広場が整備され、マンションや商業・サービス施設の新規建設が進んでいる。



も-3



も-2

向ヶ丘遊園駅北口駅前(左) 駅前に商業施設と高層マンションが立ち並び、バスロータリーがリニューアル。大きく変貌を遂げており、今後も飲食店などの新規オープンが続く予定。登戸駅前(右) 以前 JR・登戸駅は地上階にあったが、現在はペDESTリアンデッキで小田急線・登戸駅とつながっている。

## まちとまちをつなぐ 鉄道・駅

てくてくたま P8、11

小田急線やJR南武線は、通勤・通学、買い物や行楽まで、日々の生活に欠かせない存在として、多摩区発展とともに増えていった人々の流れを支えてきた。



も-3



も-3

稲田登戸駅(現向ヶ丘遊園駅)のモダンな北歐風駅舎(左、昭和20年代後半) 2段階の傾斜を持つ「マンサード屋根」が特徴的。稲田登戸駅で談笑しながら並ぶ子どもたち(右、昭和20年代後半) 向ヶ丘遊園での楽しい遠足の帰りに。



向ヶ丘遊園へ向かう豆電車(左、昭和11年) 昭和2年、小田急線開通とともに開園した自然公園「向ヶ丘遊園」の正門までは、稲田登戸駅から豆電車が運行された。豆電車のりば(右、昭和20年代後半) ガソリンエンジン式機関車の豆電車は戦後、蓄電式の豆電車となった。のりば前の親子連れからは、向ヶ丘遊園へ行くことを楽しみにしてきた表情があふれている。



豆電車で代わりモノレールが開通(昭和42年) 開業は昭和41年。2両編成の跨座式モノレールは、向ヶ丘遊園駅から向ヶ丘遊園までを3分でつないだ。平成13年に廃線。翌年、向ヶ丘遊園も閉園した。



も-2



も-2



も-2

開業当初の南武線(南武鉄道)登戸駅(上段、昭和2年) まだ人が少なくさびしそうな風景。南武線登戸駅改札から線路を渡る女子学生たち(下段左、昭和30年) 服装にもレトロな雰囲気漂っている。久地駅近くの二ヶ領用水鉄橋を渡る南武線(下段右、昭和52年) チョコレート色の車両が懐かしい。



鉄道・駅の現在



も-3



も-3



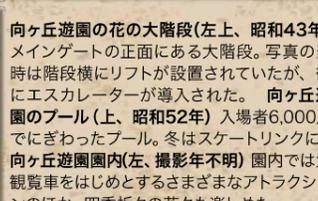
も-3

向ヶ丘遊園駅北口側(左) 令和2年に全面リニューアルされた、開業当時の面影を残す北歐風の駅舎。モノレール橋脚の1/3スケールのモニュメント(右) 川沿いの「ばら苑アクセスロード」に立っている。高さは約2m。

## 夢と非日常を届けてきた 遊園地

てくてくたま P6、8

昭和2年に開園し、子どもたちの夢の場所だった「向ヶ丘遊園」は、平成14年に惜しまれつつ閉園した。遊園地の玄関口だった場所付近には、平成23年に「川崎市藤子・F・不二雄ミュージアム」が誕生し、いまま多くの人が訪れている。また、遊園地跡地の利用計画は小田急電鉄が検討を進めている。昭和39年に開園した読売ランド(現よみうりランド)は現在、秋から春にかけてのイルミネーションや夏のプールなどの季節のアトラクションも大人気で、にぎわいを見せている。



写真協力：稲田郷土史会、小田急電鉄株式会社、株式会社よみうりランド、川崎市市民ミュージアム、登戸区画整理事務所、多摩区ソーシャルデザインセンター、合同会社ポケパーク・カントリー、学校法人中内学園 流通科学大学 参考文献：「市制80周年記念出版 多摩区ふるさと写真集」(平成16年3月、多摩区ふるさと写真集編集委員会・川崎市多摩区)、稲田郷土史会機関誌「あゆたか」



は-2



は-2

読売ランドのスキージャンプ台「読売ジャンツェ」(左、昭和39年)と「海水水族館」(右、撮影時期不明) 昭和39年、読売ランド開園と同時に誕生。ジャンプ台の塔はパラシュート・タワーとしても使用された。龍宮城では「近藤玲子水中パレエ団」による公演「水中パレエ劇場」(表紙写真参照)が平成8年まで続けられた。



遊園地の現在

開園以来、常に新しいアトラクションやエリアを導入し、進化を続けている「よみうりランド」。訪れるたびに新鮮な驚きと楽しさを感じることができる。



は-2



は-2

よみうりランド ジュエルミネーション(左) 石井幹子デザイン事務所が開発した世界初の宝石色をイメージしたLEDを使ったイルミネーションが人気。よみうりランド内にオープンした「ポケパーク カントリー」(右) たくさんのポケモンと出会い、さまざまなイベントと一緒に楽しめる、ポケモン初の常設施設。©Pokémon. ©Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc.